

佐伯史談

第七十六号

「郷土史研究」誌
通算第九十八号

昭和四十六年八月廿一日発行

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字箱根字龍護寺別荘

論説

武力と経済力

— 近世社会の変遷に見る —

会長 高木嘉吉

戦国大名の制覇は武力によるものであるが、武力の基礎として、も一つ大切なものがあつた。それは経済力である。後世に名を残した戦国大名は、何れも内治に細心の注意を払つて、経済力の増強をはかつてゐる。当時の経済力の基礎は土地であり、土地から生産される穀物であるが、これには自ずから限界がある。又産出の超過する天候不順や、暴風雨の襲来、虫害の発生等も土地への依存に、安定性を失おせるものであつた。

信長は近畿の商業に着眼し、商人に課税することによつて、彼の全割制覇の財源確保をはかつてゐる。秀吉は信長の政策をうけついで、全国制覇を完成し、更に漸く盛んになつた海外貿易に着眼して、生絲の輸入販賣を手中に収めること等によつて、富の蓄積に努めた。彼の没後に、家康をして大阪城を恐れさせたのは、難攻

不落の名城もさることながら、城内に蓄積されてゐた財貨であつた。

家康も亦富の蓄積に努めてゐる。広大肥沃な關東の封土を基礎とし、朝鮮の役に出兵をまぬかれたことも幸いして、秀吉没後に於ては彼の富強は群を抜くものであつた。關ヶ原の役に勝ち、全国制覇を完成したのも此の経済力によるものであつた。

彼も亦秀吉にならつて、海外貿易による収益に努め、富の蓄積をほかつた。

彼の没後に於ける莫大な遺産は、嗣子秀忠をして啞然たらしめたもので、金銀だけでも今日の日金に及ぶもつて二億ドルにのぼるものと推定されてゐる。家康は軍事力においても財力においても、天下に匹敵するものがない第一人者で、その政權をゆるぎないものにして後継者に残したのであ

本号内容

- 論説 武力と経済力（高木嘉吉）
- 一 近世社会の変遷に見る
- 隨感 水鴻章の湯本茶碗（高橋實）
- 二 研究 佐伯の没後と「山本」
- 詩 鳴呼立川先生（川原弘）
- 三 研究 羽茂の歴史、加藤の歴史（余野）
- 四 研究 八坂神社神事祭（五十川宗光）
- 五 研究 佐伯と前水田秋歩（山本 保）
- 六 研究 天
- 七 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 八 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 九 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十一 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十二 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十三 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十四 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十五 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十六 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十七 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十八 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 十九 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）
- 二十 研究 鶴岡城の築りて（二ノ瀬）

佐伯氏が大友幕下の雄將であつたこと及びよく知られて
いる。しかし富強を懐視されて、十代惟治は大友義隆に
攻められて、尾高智に憤死し、十二代惟教は予州に難を
避けて、久しく匿居することを余儀なくされている。

毛利氏は二万石の小大名ながら、其の内政は裕福であ
つた。これ日鶴屋城の遺構や毛利家の墓地を見てどうか
がえるし、又温故知新録による、文化元年の江戸参家中
総人数三百九十一人から考えてもう文づけることである。
此の佐伯富強のよつて来たる所は何であるか、土地
はよく開拓されて、海岸部で良耕して天に至る風景も見
られるわけであるが、山多く、平地の少ない土地、二
万石の年貢上納は震氏にとっては重い負担であつた。余
裕はごころから生まれたが、それは海へ幸からであつた。
全く佐伯の殿様浦で持つてゐる。津久見から波当津に
至る長い海岸線と出入りの多い地形は、豊富な漁場を開
拓させて、九十九瀬をうるおし、佐伯藩をうるおし、二
万石をほるかに超える経済力を与えたものである。事件
の陰に女あり、は実解明のみとつこのポイントであるが
より以上に史実の背景となり基盤となる経済力との関連
に留意することが、我々の御土史研究にも要請されるお
けである。

随想

李鴻章の湯呑茶碗

賛助会員 高橋 智

私はへたの横好きと云うか、書画骨董から刀剣、仏像
に至るまで、凡そ美術品と名のつくものは、何でも好き
である。そんなわけで、佐伯市近郷では、誰がどんな物
をもっているかを知りたい。

である。そんなわけで佐伯市近郷では、誰がどんな物を
持っているかを知りたい。又実録に願つてい
る方も多い。

この話はもうかれこれ六七年前になるが、味生町
白山でボタン作りで有名な、もう故人になつた矢野武彦
さん方を訪ね、書画を見せられたときのことである。
ちやうど床の間は、屏の赤絵の小さな壺が置かれてあつた
ので、その壺と譲つてくれたのかと頼んだところ、貴分
はこんな焼物に興味があるのかと云うので、実は書画
よりも焼物の方が好きであると答えると、それなら珍ら
しい物があると云つて話してくれたのが、李鴻章の湯呑
茶碗の落である。

李鴻章は誰でも知っている通り、清朝末期の首相級の
政治家で、明治二十七八年日清戦争の際日本軍が大勝利
を納め、日本からは伊藤博文が特命全權大使となり、中
國側からは李鴻章が大使として来朝し、下関の春帆楼で
講和談判が開かれた。

この春帆楼は、それ以来料亭として旅館として有名な
なり、安徳天皇と祀る赤間宮や、長舟の万木帝と共に、
観光名所の一つとなつている。

私は大正十三年、小学校六年の修学旅行で、海舟出身
の笠井豊先生に引率されて、この料亭を見学したことが
ある。二階大広間はなんでも六十畳敷位はあり、伊藤博
文の扁額があつたことを覚えてゐる。この大広間で講和
会議が行われたときを覚えている。

又その当時の料亭のおかみは、佐伯出身の人であつた
とか、そんな縁故かどうか知らないが、当時たまに佐
伯方面からこの料亭の下働きに働かれていた男の人がい
た。

ある日講和会議がすんで、会場の後がたづけの掃除を